

「ケアするのは誰か?」という問いの政治性と重要性

岡野 八代

新型コロナウイルスの世界的な大感染が明らかにしたのは、私たちの生活を支える営みとは何か、誰がそれを担ってくれているのかということと、政治がいかに、最も支援を必要としている人たちの声に無関心かという2つの事実です。正確に言えば、この2つとは、他者との依存関係にある脆弱なわたしたちの生について無知・無関心な政治という1つのコインの両面にすぎません。

医療や介護、保育や教育に関わる女性たち（だけではありません）が、小中高校の一斉休校に悲鳴を上げ、非正規労働で家族を経済的に支える女性たちが途方に暮れている。家族からの暴力に怯え、行き場所を失った少女たち。そして、未だ終息への道筋が見えないなか、目の前の、命を預かる人びとに責任を感じて身を削り、文字通り命を危険に晒しながらも、ケアし続ける人たちの労苦。少しの想像力さえあれば、いま誰に何が必要なのか、そして、どのような事態になっても決して止めることのできない、社会にとって不可欠な仕事（エッセンシャルワーク）は何かということは、誰にでも理解できます。

“Who Cares?”という英語表現は、「ケアするのは誰か?」と訳したくなりますが、「自分の知ったことか!」と日常的に使われる反語表現です。歴史的に、ケアを必要とする人だけでなく、ケア（育児・看護・介護・介助）する人は、社会の周縁に追いやられてきました。しかし今、コロナ禍のなか、少なくない人たちが気づくのは、わたしたち誰もが、物質的・精神的ニーズを満たしてくれるという広い意味でのケアの営みに支えられ、社会の中心にあると思われてきた経済や政治が、そうした営みにむしろ依存しているということではないでしょうか。

必要なのは、新しい生活様式ではありません。「知ったことか!」とケアを他人任せにしてきた無責任な特権者たちに、「この社会をケアしているのは誰ですか?」と問いたです、力強い政治こそが 필요한のです。



PROFILE

おかの やよ：同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員。専門は、西洋政治思想史・フェミニズム理論。現在の関心は、新著の『ケアするのは誰か?—新しい民主主義のかたちへ』（ジョアン・C・トロント著／岡野八代訳・著、白澤社、2020）で論じているように、誰が歴史的にケアを担ってきたのかという問いから、民主主義そのものを見直す研究と、ケアという営みの社会的意義・倫理的問題について。